私と広島

江村良雄
江古田三丁目

東京育ちの私の過去の人生で、二つの大きな事柄が広島という地に関わりのあることには、何か因縁めいた不思議さを感じております。

その一つは、船舶兵（海中音波探知機関係所属）として、徴用船摂津丸（大阪商船所属の一万トン級）に乗船し、本土と朝鮮間の軍隊および兵器の輸送を警護する任務でのことです。二回目に本土を出航したのは、戦いもかなり激化し、満州方面の軍隊の移動が頻繁になった頃でした。

何月何日だったのか忘れましたが、空船にて春もまだ明けやらぬ早朝、臨戦態勢をととのえ、六連島沖合いを通過中に突然轟音とともに一万トン級の船舶が、二メートルほども押し上げられ、一瞬にして停電し、船中は暗黒となりました。多くのタラップ（階段）のリベットがちぎれ、上下の行き来も困難をきわめ、まもなく船は停船してしまいました。明るみかけた甲板に集まる船員、兵隊は皆呆然と海上を見渡すのみです。敵船影もなく、音波探知機も魚雷、機雷の反応をキャッチしていませんでした。沈没の恐怖と驚きは募るばかりです。

「江村、江村」と捜すように叫ぶ隊長の声に我にかえり返答しました。「よかった、よかった」という隊長の声がかえってきました。なぜ隊長が私を捜したのか。それは、この時間帯は、船底のディーゼル発電機の運転を担当しているのは私のはずだったからです。当然この被爆で船底の吹き出す蒸気の中で、生きているはずがない私の所在を確かめるためだったのです。

では誰が船底にいたのでしょうか。戦友江口一等兵でした。彼は船酔の常習者で、特に船底の熱気とエンジンの騒音には弱く一時間の勤務は気の毒だったので、いつも私が時間表を無視し一時間半程度を務め、交替していたのです。それがなぜかこの日に限って、自分が一時間半務めるから三〇分後に降りてくるよう言い残して船底に降りたのでした。

隊長とともに懐中電灯をたよりに船底に着き、数メートルも飛ばされた彼を発見したとき、彼の体は蒸気に蒸され、軍服のボタンはみな飛び散り、見るも無惨な姿になっていました。神

のみが知る命と、運、不運を痛切に感じました。それから数時間後、到着した修理班による船底の浸水孔に鉄板を当てた応急処理で、辛うじて沈没は免れ、曳航されて着いたのが、広島県因島にある、日立造船所の「ドッグ」だったのでした。

下船後数日は、神戸の原隊におりましたが、乗船する船舶は破損や沈没により皆無の状態でした。

＊　＊　＊

二つ目の事柄は、再び派遣された広島市宇品の島でのことでした。(宇品の付近の島だということだけで、何島なのかは、わかりません。)私が広島駅に着いたのは、たしか原爆投下日の十日ぐらい前だったように思います。当時の総ての記憶が非常に曖昧なので、記録として書くことに一抹の不安を感じるのです。被爆後四九年の歳月と、あの忌まわしい地獄図を思い出すまい、忘れようと務めた結果なのでしょうか。不適当な点はお許し下さい。

私のように入市して日も浅く生活に基盤もないものにとって、地名はもとより、西、東の区別もはっきり記憶に残ってないので、どこをどうして宇品の部隊まで着いたかは、記することはできません。唯一、入市時の印象だけは今でもはっきり覚えています。それは空襲もなく、広島市民が戦争の渦中にいるのだろうかと疑いたくなるように明るく生活していることでした。なぜ印象に残っているのでしょうか。それは、東京や大阪の大空襲を経験し、海上勤務中には、多くの軍籍船舶や漁船、その他の船舶が機雷の被害を受け、沈んでいくのを目の当たりに見てきた私にとって、驚きとねたましさを感じたからでしょうか。

さて宇品の島に派遣された目的をお話しします。戦況も悪化した春頃から、アメリカ軍の投下する音響機雷なる新兵器が、宇品港を含む近海に多数敷設されていることが確認され、軍の船舶、特に兵士の輸送も、資材の搬出入もほとんど不可能に近い状態でした。そこで、この機雷を一日も早く調査、掃海し、多少なりとも海上輸送の好転を期するよう、掃海方法の探求、掃海の実施を要求され、若干名の兵隊が集合したのでした。結果は暗中模索で数日が経過してしまいました。

国のため命を捧げることには何の抵抗も感じませんでしたが、いつ、どこで戦死するかはわかりません。いつの頃からか、同じ死ぬのなら八月五日にしてほしいと思うようになりました。それは、私が九歳の年に、大好きだった母が他界した日だったからでしょうか。

＊　＊　＊

八月六日の朝は快晴。心地よい潮風を背に受け、朝の点呼のため、兵舎の外に集合中でした。警報も解除され、またこの一年おおいに頑張れると大きく深呼吸したその瞬間でした。

青い空に、オレンジ色の閃光が「ピカー」。顔、顔、顔が一様に同じ方向に集視し、声を発するものはいません。

何秒くらいたったのでしょうか、「ドカーン」という轟音と地鳴り、間をあけて、ものすごい爆風と熱風が、「ゴー」という音とともにやって来ました。「伏せろ、伏せろ」の声、熱風の熱さに顔を覆う者、爆風のため転倒する者、恐いものみたさに顔を上げる。警報解除後です。空襲であるはずがありません。市内にある火薬庫の爆発ではと、隣の友と話しました。ムクムクと昇る巨大なきのこ型の雲。今までにみたことも聞いたこともないものです。並の爆発ではありません。

ただ呆然と立ちすくみ、数時間経過しました。ときおり入る情報にも半信半疑です。市内は全滅であるとの報。そんな馬鹿(ばか)なと思いながらも、見るも無惨な被災者が続々と運び込まれてくるのでした。誰の命令でもない。生あるものは、兵隊はもとより、総(すべ)ての人々が行動しなければなりません。工場跡のような屋舎に、あるだけの毛布を敷きつめ、被災者の収容に当たりました。

多くの人々は全裸か、全裸に近い人たちで、男女の区別も困難な人、熱風によるものだろうか、火傷なのか「ブヨブヨ」の皮膚は触ることもできません。わずかに前面に残った火傷のない皮膚に手をかけて寝かせるのです。もちろん命のあるものに限られました。とても収容できないからです。

配られた荷札に被災者の住所、氏名、その他話してくれた事柄は、できるだけ多く記入しておく必要があるのですが、方言や地理に疎(うと)い私は戸惑いのためか、長い時間を必要としました。

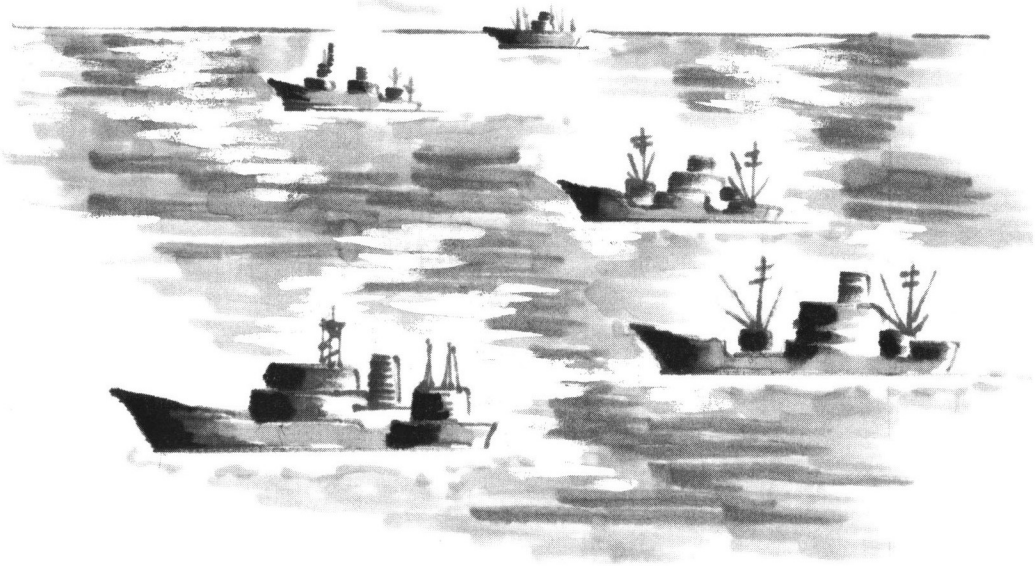
書き込んだ荷札は、辛うじて残った衣服か、持ち物の一部に結びつけ、「頑張って、頑張って」と声をかけながら、次の人、次の人と駆け回りました。耐えきれないような悪臭も、見るに忍びない肢体も、「兵隊さん助けて」の声に、何も感じなくなっていきました。医者だ、薬だといわれても、この島には軍医も町医者もいないようです。私たちも二日ほど前に入島したばかりで、全く未知なのです。

火傷には油は非常識なのかもしれませんが、手当としては、油（何油か記憶にない）に、亜鉛華なのか、メリケン粉なのかさだかではありませんが、とにかく練り合わせ塗布する以外に火傷した者の気持ちを和らげる方法はなかったのです。燈火管制下の悪夢のような暗黒の夜、月光に真白に塗られた肢体が叫び、うごめく光景はまさに地獄絵そのものでした。

翌朝屋舎に入り驚いたのは半数近い人々が、毛布だけを残し消えているのです。一夜のうちに息を引きとったに違いありません。真夏のため死者を長く置くことはできません。夜の勤務に当たった兵隊が、裏方にある小さな丘に埋葬したもので、火葬にすることは、アメリカ軍の目標になるので、できなかったのです。

私が受け持っていた被災者の中に、建物の下敷になったのか、足の複雑骨折と、吹きだした血液で赤黒く変色した白布を無造

作に巻き付け、横たわるあどけない童顔の少女がいました。
激しい痛みを堪えながら、被爆の様子を話してくれました。彼女は六日の朝女学校の同級生たちと、市内の疎開家屋の取り壊し作業中、たまたま建物の蔭に回った瞬間被爆し、一命を取りとめたとの事でした。
「兵隊さんありがとう、この戦争が終わって私も兵隊さんも元気でいられたら、ぜひ家に遊びに来て下さい。知ってますか？広島はね、柿と牡蠣が名物なの、御馳走しますからね。」治っても片足は使うことはできないであろう少女の言葉に、目頭の熱くなるのを覚えました。
長い会話をしている時間はありません、あちこちから「兵隊さん」、「兵隊さん」と呼ぶ声、「お水を下さい」、「子供は見つかりましたか」、「おしっこがしたいの」、「トイレまで連れてって」。親兄弟の無事を尋ねる人たちに気休めで悪いとは思いますが、大丈夫ですよと返答するしかありませんでした。
その後、この少女には、会うことはありませんでしたが、多分親族に引きとられて行ったに違いありません。なぜかそれまで牡蠣など食べた事のない私でしたが、今では牡蠣は私の好物の一つになりました。
医学の知識のない私にはわかりませんが、感じたことが二つあります。一つは大半の被災者が、下痢症状を訴えていたこと、二つは女性の生命力の強さです。これには本当に驚きました。
再び起こるかもしれない、あの「ピカドン」の恐怖と、暗黒の夜、悪臭がただよう不潔な屋舎、被災者の叫び、要求。夢中で過ぎ去った数日でした。
十五日の玉音放送も、聞くことはできませんでしたが、戦争は終わった、いくさは敗れたのだと知り、得もしれぬ安堵感を感じました。また、何のために、誰のために命を賭したのか、国のためと命を捧げた人々は犬死にだったのかと考え、生きていることに引け目も感じました。そして、これから始まる我々の行動と処遇に対し、一抹の不安を抱き、わずかに残った被災者に後ろ髪を引かれる思いで、当時神戸にあった原隊に帰りました。
投下された「ピカドン」こと新型爆弾が、原子爆弾だと知ったのは、それから何日も経ってからでした。そしてその放射能の被害が人体に及ぼす影響が異常なほど大きいことを見聞きすることにより、その恐ろしさを感じました。そして、私の身体にどういう形で表れてくるのか、結婚には支障がないとしても、生まれてくる子供は正常に生活できるのだろうか、その他いろいろの不安が心の奥底に潜んでいました。そしてこの不安がいつの日か突然はっきりとした形で表れ、大きな壁となって苦しむのではと、内心穏やかではありませんでした。
後日のためにと、当時都庁に勤務していた友人が、親切にも被爆者健康手帳の申請をしてくれましたが、被爆者の証明であ

る手帳は、人生の重荷であると思っていた私は、久しく引き出しの奥にしまい込んでいました。五九歳の春、胃の切除手術の際、使用させていただき亡き友の親切を改めて感謝いたしました。

被爆後、半世紀が経過し、被爆者の人々も年をとりました。私たちの最大の目標である被爆者援護法も、未だに制定の域に到りません。しかし、近年地区の若い人々の理解と協力により、一歩一歩進展しております。何よりも私たちの願いは殺戮（さつりく）兵器原子爆弾はもとより核兵器の完全廃絶です。次世代の人々が再びこの悲劇に遭（あ）うことのないよう、声を大にして、命のある限り訴え続け、頑張っていきたいと思います。